

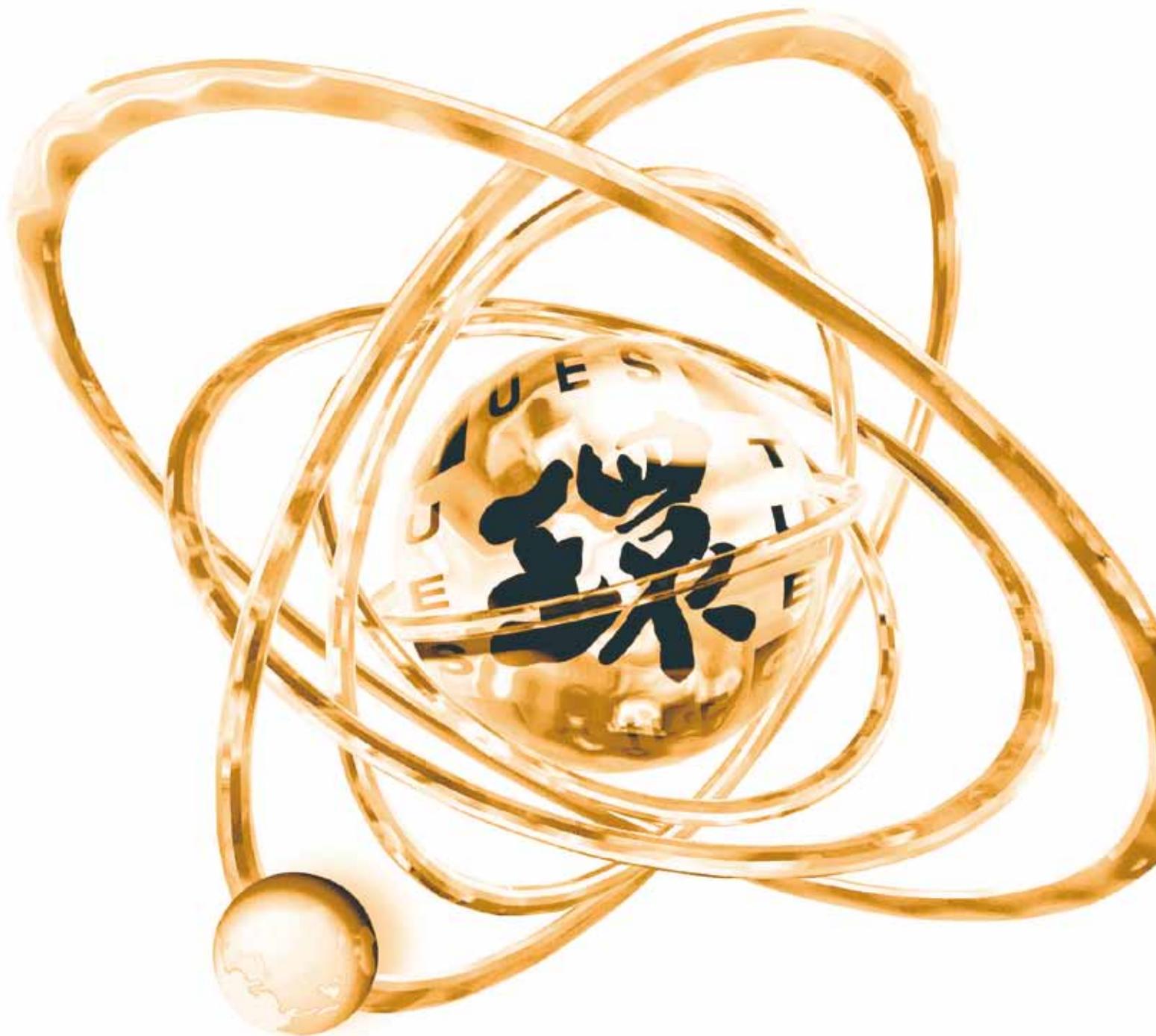
若葉台レポート

W A K A B A D A I R E P O R T

鳥取環境大学報

Tottori University of Environmental Studies
Public Relations Magazine

第16号



特集

公立大学法人化に向けて / 学部学科改編 Q&A

鳥取環境大学は
公立大学法人化へ向けて

生まれ変わります

2 3



キャンパストピックス

第46回鳥取しゃんしゃん祭/清州大学との交流/環謝祭
第7回全国高校生環境論文 TUESカップ

4 5



鳥取環境大学開学10周年記念事業

開学10周年記念式典報告

6



プロジェクト研究

数学が役に立つかどうかを検証する / 情報システム学科 吉田聰 講師

7



2010年度前期 キャンパスニュース

8 9



ESSAY

2010年5月～11月

10



クラブ&サークル活動

サステイナビリティ研究所

弓道部/学生メロディー同好会/次世代バイオ燃料の適用性評価

11



お知らせ・その他

2010年度保護者懇談会(御礼)/2010年度 学部・大学院 学位授与式/公開講座

12



特集

鳥取環境大学は 公立大学法人化へ向けて

生まれ変わります

平成24年4月の公立大学法人化を目指し、平成22年10月19日、大学の魅力づくりや、学部・学科の改編などについて協議を行う、「新生公立鳥取環境大学設立協議会」が設置され、事務局が学内に設けられました。この協議会は、平井鳥取県知事を会長に、竹内鳥取市長を副会長に置き、県、市、本学の三者から構成されています。

また、本学では、平成22年2月に「大学運営改革委員会」を設置し、人事評価制度の導入・授業改善・学生アメニティ向上・就職支援の充実等の検討を行い、本学独自の大学改革を推進しています。

今後も、学生や地域のニーズをくみ取った更なる大学の魅力づくり、一層の大学運営改革、経営改善などの大学改革に取り組み、公立大学法人化実現に向け、魅力ある大学づくりを進めていきます。



公立大学法人化への 取組経過

平成22年	鳥取環境大学改革検討委員会の報告書を受け、理事会は、5月鳥取県知事、6月鳥取市長に対し、2学部2学科への学部・学科改編の基本構想と学内改革の状況を報告し、鳥取環境大学の公立化の協議を要請。
5月～6月	鳥取県と鳥取市は共同で、有識者で組織する「鳥取環境大学改革案評価・検討委員会」を設置。 目的：鳥取環境大学が示した改革に向けた取組の検証を行うとともに、設置形態も含め、今後の大学のあり方を検討する
8月	鳥取環境大学改革案評価・検討委員会が、報告書を県知事及び市長に提出。
9月～10月	鳥取県議会及び鳥取市議会において、「鳥取環境大学公立大学法人化協議会（仮称）」の、県と市の共同設置・運営に関する予算案」が提案され、両議会で可決。
10月19日	平成24年4月の公立化を目指し、大学の魅力づくりや、学部・学科の改編などについて協議を行う、県・市・本学の三者から構成された「新生公立鳥取環境大学設立協議会」が設立。

学部・学科改編の 基本構想

改編後 2学部2学科（平成24年4月より改編予定）

現行	1学部4学科 環境情報学部
	環境政策経営学科
	環境マネジメント学科
	建築・環境デザイン学科
	情報システム学科



環境学部 環境学科	●自然環境保全プログラム ●環境マネジメントプログラム ●循環型社会形成プログラム ●住居環境プログラム
「持続的な地域づくりのための具体的な提案・実践ができる人材の育成」を目指し、環境問題を地域と関わりながら取り組む授業やグローバルな視点を養う教育を通して、基礎的な思考力・行動力や高い教養、専門的な知識と応用力を身につけた人材を育てます。	
経営学部 経営学科	●企業経営プログラム ●地域経営プログラム ●国際経営プログラム ●経営情報プログラム
社会における持続可能な経営のあり方、経営活動における環境要因の経済的評価などのテーマを通じて、産業や企業が直面する現在及び将来の課題を把握・分析し、地域と協働・実践することにより、課題解決に当たる人材を育てます。	

学生、地域及び企業のニーズを踏まえ、山陰初の経営学部の設置を検討するなど、近隣大学の教育内容等との差別化を図りつつ、鳥取県らしい学部として対外的にアピールできるような特徴をもつ魅力ある学部学科となるよう、今後も検討を進めていきます。

経営改善	大学運営改革
(1)収入の増 <ul style="list-style-type: none"> ○学生確保対策の強化 ○外部資金の獲得など (2)支出の削減 <ul style="list-style-type: none"> ○人件費の削減 ○個人研究費の削減 ○その他経費の削減 	①教職員評価制度の導入 ②授業改革(FDの推進) ③学生のアメニティ向上 ④就職支援体制の充実 ⑤職員の大学運営能力の向上(SDの推進) ⑥その他運営改革の目的を達成するための対策

鳥取環境大学は
公立大学法人化へ向けて
生まれ変わります

設置形態の変更 及び学部・学科改編について



Q1 いつから公立大学になるのですか。

A1 鳥取県と鳥取市は、平成24年4月からの公立大学法人化を検討しています。

※ 現状は、鳥取県と鳥取市が協力して設立し、学校法人が運営しています(公設民営)。

※公立大学法人とは、平成16年4月にできた地方独立行政法人法により、県などの地方公共団体が大学の設置及び管理を行うために設立する法人のことと言います。

Q2 公立大学法人化に移行した場合(私立大学から公立大学に変更)の授業料は、どうなりますか。

A2 変更年度より、在籍している学生全員の授業料が減額される可能性があります。なお、平成21年度の公立大学の授業料の平均は536,632円/年です。(文部科学省調査より)

Q3 私立大学から公立大学に設置者が移行した場合、在籍学生の所属はどうなりますか。

A3 平成24年4月から変更された場合、その時から学生全員が新しい大学(公立大学)の所属となります。
また、卒業も、公立大学卒となります。

Q4 学部学科の改編の時期はいつですか。

A4 平成24年4月を予定していますが、決まり次第、大学ホームページ等でお知らせします。

Q5 学部改編前に入学した学生の所属学部(学科)、教育課程、学位や資格などはどうなりますか。

A5 改編後も、入学時の学部(学科)はそのまま残ります。卒業学部(学科)も入学時の学部(学科)です。また、入学時の教育課程は卒業するまで提供され、教育は保障されます。授与される学位並びに取得できる資格、免許等も変わることはありません。

Q6 公立化によって、入学試験に変更がありますか。

A6 平成21年4月に公立化した高知工科大学の例になりますが、平成21年度入学者の入学試験は、私立大学として従来どおりの方法で試験を行いましたが、翌年(平成22年度入学者入試)以降は、私立大学グループから国公立大学グループになるため、公立大学に足並みを揃えた入試方法(一般入試は、「分離分割方式」(前期日程・後期日程))で試験を行っています。この場合、一般入試は必ずセンター試験を利用することになります。

Q7 公立化すると、どのようなメリットがありますか。

A7 設置運営主体が県などの地方公共団体で、安定した大学運営が可能となり、県民・市民からの信頼性が高まります。

また、学費は、他の国公立大学同様のレベルにまで引き下げることが可能となります。

更に、県・市と大学の連携がこれまで以上に強化されることによって、地域が必要とする人材育成や地域課題に密着した教育・研究活動を行うことができ、より一層の地域貢献ができる魅力ある大学になると考えています。



キャンパストピックス

第46回鳥取しゃんしゃん祭 参加レポート

8月16日(月)、鳥取市の風物詩「第46回鳥取しゃんしゃん祭」に、本学学生と同窓生(鳥取環境大学同窓会Re;TUSE)合わせて100人近くが鳥取環境大学連として参加しました。

「鳥取しゃんしゃん祭」は、江戸時代末期の雨乞いの踊りが起源とされています。本学は開学以来、毎年「連」を組み参加してきました。

今年度は練習時間を昨年より5割増やし、踊り子リーダーには、踊り講習会に出席して、正しい振り付けの再確認をしてもらいました。そして、指導方法の検討や問題点の改善を行いました。なかなか練習に参加できない学生もリーダーや委員会が協力して、時間外の練習や自主練習を行い、祭当日に向けて地道ながらも確実に学生の踊りは上達していました。今年は隊列を組んでの練習も昨年より多く行い、統一性を高めることにも成功しました。

祭の日程は8月16日と昨年より一週間遅い日程となりましたが、今年は早い段階で着替え会場等の確保を行ったので、大きな問題は起きて、とてもスムーズに準備する事が出来ました。そして、教職員の皆様・地域の方々のご好意や協力のおかげで、無事100名近い学生のサポートをすることが出来ました。

今年のしゃんしゃん祭は、基本踊りの「きなんせ節」と「鳥取しゃんしゃん踊り」の統一感に重点を置いた流れになっていたため、一斉美を目標に練習を進めました。練習では、傘の振り方や



角度、列を乱さずみんなで息を合わせて踊ることなどを目標に、全体で美しい見えるよう努力しました。

出陣式では八村理事長を始め、古澤学長、西田就職担当参与、谷口常務理事から激励の言葉を頂戴し、総代の掛け声で学生の意識を高め踊りに向かう事が出来ました。パレードが開始されると踊り子全員が一丸となり、大きな掛け声とともに若桜街道と智頭街道を踊り歩きました。祭開始直後は、雲がかかっており、雨で中止にならないかと心配していましたが、雨が強くなる事はなく、雲は晴れ、雨乞いの踊りではなく、晴れ乞いの踊りかと思いました。残念ながらコンテストに入賞する事はできませんでしたが、今年の声の出し方や踊りの統一感等は、教員・同窓生ともに今までで1番と認める出来となりました。そして、来年こそコンテストで入賞するとみんなが意気込んでいました。

また、今年も学生の有志で結成する「ゴミ拾い隊」が活躍しました。連の後ろに付き、沿道にある傘の破損ゴミや煙草の吸殻等多くのゴミを回収分別して鳥取環境大学生らしく環境美化に努めました。

プログラムに参加しました。

8月17日、私たちは岡山空港から仁川国際空港に向け出発しました。仁川国際空港では清州大生が「鳥取環境大学の皆様、心より歓迎いたします。」と書かれた横断幕を掲げて笑顔で出迎えてくださいり、清州大生の温かい歓迎に感激しました。初日は、明洞、ソウルタワーに行きました。2日目は清州大学校見学、韓国文化についての講義、清州古印刷博物館、韓国の伝統音楽の体験。3日目はハーブ園、ドラマのロケ地巡りをして、清州市の副市長とお会いしました。最終日はソウルで買い物をしました。

その中で特に印象に残ったのは、韓国の伝統音楽の体験でした。みんなでそれぞれ3種類の楽器を担当して演奏しました。私は太鼓の一種「つづみ(チャング)」を担当しました。最初は、太鼓を打つリズムがうまくとれませんでしたが、演奏家さんたちが丁寧に身振り手振りで教えてくださったのでなんとか太鼓を打つことができました。そして最後に皆で演奏したとき一

今年は、けが人を出さずに無事に終えることが出で、踊り終わった学生からはとても楽しかったと感想をもらいました。それは、練習から本番まで踊り子を先導してくれたりーダー、踊り子、ゴミ拾い隊の皆、教職員の皆様そして地域の方々のおかげで得られた思い出だと思います。そして常に努力しサポートに回ってくれた委員会メンバーの頑張りの賜物だと思います。来年は今年よりも良い祭になるように、踊り子達が楽しめるように、そして見ている人により一層楽しんでもらえるように努力していきたいと思います。

最後に、毎年しゃんしゃん祭への参加支援をしていただいている同窓会並びに、大学関係者の皆様に心から感謝を申し上げます。今後の活動においても、引き続きご支援を賜りますようお願い申し上げます。

年に1度のしゃんしゃん祭が、参加してくれた全ての方にとって夏のよい思い出となりますように、そしてこの感動がこれからも鳥取環境大学を盛り上げていくように願います。

TUESしゃんしゃん愛好会 委員長
竹島 昌邦(情報システム学科2年)



体感が生まれました。私は「今、韓国に居るのだ」と改めて感じました。韓国での楽しい日々はあっという間に過ぎていきました。

8月24日には清州大生たちが来ました。初日は日韓友好交流公園「風の丘」と鳥取砂丘へ行きました。2日目は鹿野そば道場、青谷和紙工房、山根酒造場、浜村温泉に行き、3日目は鳥取市の副市長にお会いして、本学で荒田先生の海ごみの講義を受け、浴衣・茶道体験をしました。最終日はジャスコ日吉津店に行き、米子空港で清州大生を見送りました。清州大生に鳥取で何が楽しかったかと聞くと、鳥取砂丘や浴衣の着付けなどが楽しかったと答えてくれました。私は清州大生の方が鳥取を楽しんでいただけるかどうか心配だったのですが、楽しかったと返事をもらえたとのことでほっとしました。

今回のプログラムで私が一番不安だったことは、言葉でした。韓国へ発つ1ヶ月前から韓国語を少し勉強していましたが、やはり付け焼刃でほとん

清州大学との交流



今回、私は今年度で3回目となる韓国・清州大学校との交流プログラムに参加しました。このプログラムは大学間で相互に学生を派遣し文化研修を行うというもので、8月17日から20日までの4日間に本学学生が清州市を訪問し、8月24日から27日の4日間に清州大学校の学生が鳥取市を訪問しました。今年度は本学から8名と清州大学から10名の参加でした。私は以前から韓国の文化に興味があり、韓国に行ってみたいと思っていたので、この



ど役に立ちませんでした。幸い清州大生には日本語を専攻している学生が多く、日本語が上手な学生が多かったのでコミュニケーションを取ることはできましたが、それでも言葉が通じない

場面もあり「ああ、韓国語か英語が話せたらなあ。」と思うことがしばしばありました。今回のプログラムで改めて言語を学習する重要性を確認しました。それでも、片言の韓国語でコミュニケーションが取れたときは本当にうれしかったです。韓国料理を食べて韓国の方に「マシッタ(おいしい)」と言うと、ともうれしそうでした。たとえ、片言やジェスチャーでも気持ちが伝われば、本当にうれしいことです。今後、もっと韓国語の勉強をして韓国の友達を増やして行きたいと思います。この交流プログラムは異文化体験だけでなく、様々なことを感じたり、考えたり、そして

新しい友達ができる貴重なプログラムだと思います。来年はさらに多くの学生の皆さんに参加していただけたらと思っています。

高橋 直子(環境マネジメント学科1年)



環謝祭



10月23日(土)24日(日)の両日、第10回鳥取環境大学大学祭『環謝祭』が開催されました。今年は環謝祭も10回目となり、新たな節目の年。今年のテーマとなっていたのは、「かんしゃ」。今回は、「環謝祭」という名前からテーマを導き出し、在学生・卒業生を始め、地域の方々、鳥取環境大学に関わりをもって頂いている全ての皆様に感謝の気持ちを伝えたいということで、このテーマに決定しました。

環謝祭実行委員会が主催し企画立案

した各種イベントを中心に、エコピング、学生バンドライブ、アカペラライブ、ダンスなどの学生団体のステージイベント、21団体が出店した模擬店、開学10周年を期に卒業生と在学生が語り合う「青空ディスカッション」など、多種多彩なイベントで盛り上りました。また本部講義棟11講義室にて「影山ヒロノブ&栗林みな実 アニソンライブin環謝祭」を催し、鳥取に限らず、県外からのお客様のご来場もあり、立見が出るほどの大盛況となりました。お陰様で両日ともに大きな事故もなく無事に終了することができました。

大学祭において環境活動を実施すべく、毎年恒例となっております模擬店でのリターナブル食器の使用義務付けとゴミの分別の徹底、今年は新たに「コスプレ喫茶」「流しそうめん」などのイベントで使用された、サトウキビの搾りかすから製造された食器、バガスマールドの使用など、環境への配慮に力を入れました。

本学学生のみならず、多くのお客様

にご来場頂き、賑やかな大学祭となり、多くの学生が大学での良き思い出の一つになったのではないかと思います。

今回も私ども実行委員に限らず、学友会執行部の方々、当日スタッフ、司会として参加して頂いた本学学生の皆様、理事長や学長をはじめ、ご支援頂いた教職員の皆様、卒業生、地域の皆様など、環謝祭に関わってくださった全ての方々へ心よりの感謝を申し上げます。来年もどうぞこの「環謝祭」にご期待くださいますようお願い申し上げます。

大学祭実行委員会 委員長
神谷 隼人(環境政策学科3年)



第7回全国高校生環境論文 TUESカップ

地球環境問題について、高校生の意見を発表してもらうことを目的に、全国の高校生から環境論文を募集しました。募集テーマは「環境問題ーわたしのまちから考えるー」。北は北海道、南は沖縄まで全国26都道府県、48高校から766作品の応募がありました。自身が暮らすまちに起こる環境問題と向かあういいきっかけとなりました。

10月10日(日)に、入賞作品の表彰式が行われ、あわせて入賞作品のうち上位4作品の発表会が行われました。表彰式・発表会終了後には、環境映画「OCEANS」の上映会も行われ、多数の方が来場し、盛会裏に終了しました。

〈受賞者一覧〉

【環境大賞】

Do Tank > Think Tank
中川沙羅葉さん 筑波大学附属坂戸高等学校(埼玉)3年

【鳥取県知事賞】

コウモリ研究と地域環境の関係性について
中村一輝さん 北海道富良野高等学校(北海道)3年

【鳥取市長賞】

あなたのまちにもいませんか?
海老原健太さん 栃木県立小山北桜高等学校(栃木)2年

【新日本海新聞社賞】

'2010年の決意ギフチョウが消えた里山から
春木貴志さん 大阪府立園芸高等学校(大阪)3年



【佳作】

落ち葉による硝酸態窒素の除去方法
園田修平さん 宮崎県立宮崎大宮高等学校(宮崎)2年

三木のまちで考える~サッカー小僧からみた環境問題~
菊本祥平さん 兵庫県立三木北高等学校(兵庫)3年

海と人が生きるためにには
吉井萌恵さん 筑波大学附属坂戸高等学校(埼玉)3年

【学校賞】

都城工業高等専門学校 (宮崎)
兵庫県立尼崎北高等学校(兵庫)
島根県立津和野高等学校(島根)

【奨励賞】

北海道札幌藻岩高等学校 (北海道)
北海道滝川高等学校 (北海道)
愛知県立岡崎工業高等学校(愛知)
愛知県立鶴城丘高等学校(愛知)
岐阜県立岐山高等学校 (岐阜)
神戸学院大学附属高等学校 (兵庫)
育英西高等学校 (奈良)
聖カタリナ女子高等学校 (愛媛)
岡山学芸館高等学校 (岡山)
福岡工業大学附属城東高等学校(福岡)



鳥取環境大学 開学10周年記念式典

平成22年6月19日(土) 鳥取環境大学開学10周年を記念して、記念式典を執り行いました。当日は、平井伸治鳥取県知事をはじめ行政、経済界、教育関係、報道の方々の他、退官された先生、職員、卒業生、現職の教職員など約400名が見守る中、盛大に開学10周年を祝いました。



記念式典 第一部

記念式典は、本学11講義室にて開催しました。

まず、古澤巖学長が「社会に開かれた大学として必要な改革を断行し、地域が誇れる魅力ある大学作りに邁進したい」と式辞を述べました。



続いて八村輝夫理事長が挨拶を述べた後、藤井喜臣鳥取県副知事、竹内功鳥取市長、清水昭允鳥取環境大学を支援する会会長に御祝辞を賜りました。

また、開学時より長年に渡り本学をご支援いただいている「鳥取環境大学を支援する会」への感謝の意を表し、会員各社を代表して清水昭允会長へ感謝状を贈呈しました。



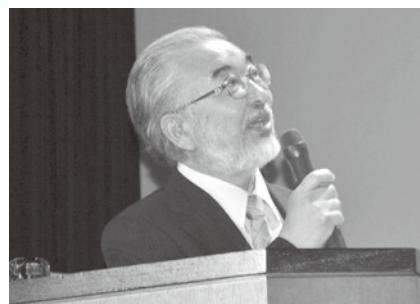
最後に在学生を代表して第10代学友会執行部会長の山田航平(環境政策学科3年)さんが、「諸先輩方が作り上げてこられたものをどう発展させていくのかを考え、学友会執行部会長として新しい風を吹き込みたい。」と決意を述べ、第一部を終了しました。



記念式典 第二部 記念講演会

記念式典の第二部は、財団法人国際高等研究所の尾池和夫所長を講師に、記念講演会を開催しました。講演は『変動帯に生きる』と題して、日本列島の成り立ち、日本の伝統文化を交えながら理科教育の重要性について熱く語られました。

尾池先生は日本ジオパーク委員会の委員長でもあり、鳥取の土地の特性を交えながらのお話で大変興味深い講演でした。



記念植樹式

学生センターの東へ広がる芝生の一角へ、本学同窓会Re;TUESより寄贈していただいた「ソヨゴ」を植樹しました。花言葉は「先見の明」です。ソヨゴが、

その生長とともに本学のますますの発展を見守ってくれることと思います。



祝賀会

祝賀会では、開学時よりお世話になっている方々、教職員、卒業生等、懐かしい面々も揃い、和やかな雰囲気のもと昔話に花を咲かせました。

最後に、新たな10年に向かっての決意を込め、万歳三唱とともに10周年記念式典を終了いたしました。



保護者のみなさまを始め、関係各位のみなさま、地域のみなさまには、開学からの10年間大変お世話になりました。今後ともみなさまのご支援、ご協力のもと、改革・発展していく所存でございます。感謝を申し上げますとともに、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。



【プロジェクト名】

数学が役に立つかどうかを検証する

【プロジェクトコンセプト】

数学は科学技術の基礎であり、様々な分野の技術者は「役に立つ」ということを実感しているが、大学の初年度くらいまでの学生はそれを実感として持つ機会は少ない。そして、その実感を持つ機会の少なことが「数学嫌い」の理由としてしばしば挙げられる。本プロジェクト研究では、数学の応用と教育について調査、議論および実践を行い、数学を学ぶことの意義を学生自身によって与えられるようになることを目指した。

【プロジェクト概要】

講義期間を4つに分けて、それぞれにテーマを設定した。

第1期複利法や単利法による利子計算の調査。

第2期中学校学習指導要領(数学)の講読と、自分が中学生の頃の体験を踏まえた数学教育の目標と実際についての議論。

第3期ものさしなどでは量りきれない大きな距離や高さの計測。三角比や円周率に基づく計算によって結果を得る。

第4期学生の提案による活動。

全体を通して

参加者は、数学的知識と身近な道具を工夫して測量を行うという体験をした。また、ここで紹介できなかったが、パチンコなどの娯楽機械を調査し、それらに数学的基礎があることも知ることができた。これらの活動をきっかけに、今後、難しいと思うことがあってもとにかく実際に取り組んでみるという姿勢で大学での学習や研究に望むことを期待する。

プロジェクトメンバー

島本怜希(情報システム学科2年)、城本加壽彦(情報システム学科2年)、山下和彦(情報システム学科2年)、藤田拓志(建築・環境デザイン学科1年)、森誉史(環境マネジメント学科1年)

指導教員

情報システム学科 吉田 聰 講師

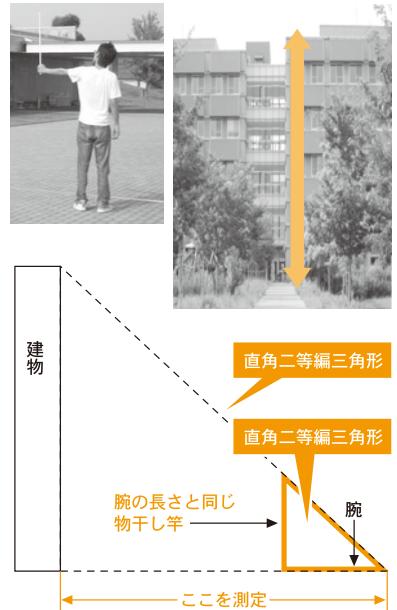
プロジェクト活動概要

第4期の活動の1つである「大学内の測量」の一部を紹介する。

目的:大学内の外周の距離や建物の高さを計測し、自分達で「大学の大きさ」を把握する。方法:数学的知識と身近にあるものを工夫して、安価で容易に行える方法を考案する。 使用した道具:メジャー(10m)、カウンター、物干し竿(伸縮可能)、自転車(2台)、カラーテープ。

1 大学建物の高さ

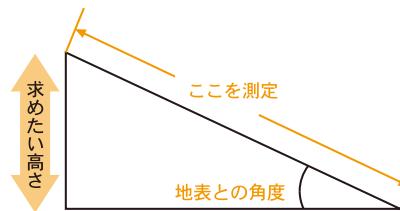
学内の施設のうち、教育研究棟、メディアセンター、体育館、学生センターの高さを計測した。まず、伸縮可能な物干し竿を計測補助者の腕の長さに合わせた後、その腕を水平にしたまま物干し竿を腕に垂直にして持つ。これにより、腕と物干し竿による直角二等辺三角形を作る。その状態で、計測対象の建物を見上げる場所の範囲で、物干し竿の先にその建物の天辺が重なって見える位置に計測補助者は移動する。このとき、この位置からその建物のある位置までの線分を辺とし、地表からその建物の天辺までの垂直な線分を辺とする直角二等辺三角形が得られる。したがって、計測補助者の位置から建物の位置までの距離を計測すれば、その距離がその建物の高さに一致することになる。この方法によって、教育研究棟は20.19m、メディアセンターは14.7m、体育館は15.5m、学生センターは8.98mという結果が得られた。



2 大学敷地内の高低差



本学メディアセンターは大学正面入口から奥に向かって上って行く坂の上に位置している。ここでは、この大学正面入口の位置とメディアセンターの位置の高低差を計測した。まず、坂の上の位置から下の位置までの距離をメジャーで計測し、さらに、その位置において地表とメジャーのなす角度を計測する。ここで得る値と三角比を用いて高低差を計算する。この方法によって、高低差は14.13mであるという結果が得られた。





2010年度前期 キャンパスニュース

八頭町の環境共生まちづくりに貢献！学校給食車がバイオ燃料で運行開始

平成22年5月11日(火) 八頭町郡家学校給食共同調理場で、学校給食車バイオディーゼル燃料運行開始式典が行われました。本学は、昨年8月に八頭町(鳥取県)と循環型地域の形成、地域の活性化に向けた取り組みを相互に連携・協力して進める協定を締結し、「中山間地域(八頭町)の環境共生まちづくりと地域活性化に関する研究」に取り組んでいます。その一環として、循環型地域をめざし、八頭町内の学校給食調理場から出る廃食用油をバイオ燃料に精製し、給食配送用車両の燃料として使用することになりました。

運行開始式典終了後、配送車両は町内各小・中学校に向け出発し、本学と八頭町が取り組む環境共生まちづくりがまた一步、動き出しました。



めざせSE！～基本情報技術者資格取得講座～ 開講

平成22年5月15日(土) 「めざせSE！～基本情報技術者資格取得講座～」と銘打った特別講座がスタートしました。講師は、IT育成支援企業として鳥取県及び鳥取市から認定を受けている株式会社LASSIC(システム設計・開発、本社：鳥取市)の社員の皆さん。受講生は、本学情報システム学科生22名。IT専門職を目指す学生へのエントリー資格として実績のある国家資格「基本情報技術者試験」の合格を目指します。

学生にとっては、資格試験合格のためのノウハウを得るだけではなく、IT業界の最前线で活かされている知識・技術の習得なども期待され、SE(システム・エンジニア)という具体的な職業に興味を持つなど、各々が目標を掲げて取り組んでいます。



平成22年度 鳥取環境大学 奨学生が決定しました

平成22年5月28日(金) 本学学長室にて、「平成22年度 鳥取環境大学奨学生交付式」が行われました。

本奨学生は、学業奨励及び学内の活性化を目的に平成21年度より創設された本学独自の制度で、高校時代に環境活動の実績がある学生を対象とした「環境活動部門」、また高校時代に文化・スポーツ活動において全国大会等の出場実績がある学生を対象とした「文化・スポーツ活動部門」、本学入学後、学業成績が優秀な学生を対象とした「成績優秀部門」の3部門から奨学生が支給されます。

古澤学長より交付決定通知を交付された後、環境マネジメント学科2年の赤澤ひとみさんが22名の奨学生を代表し、「学業はもちろんのこと、課外活動でも積極的に活動していく」と、これから的学生生活の抱負を述べました。



本学学生が 環境計量士(濃度)に合格

この度、環境政策学科3年の笠崎 大さんが「環境計量士(濃度)」に合格しました。環境計量士は、環境に関する濃度、騒音・振動の機器や計量手法を管理し、数値が正しいことを証明する業務に必要な国家資格です。一般的の関係業務に携わっている社会人が多く含まれる中、合格率10%程度で、環境に関する資格の中では最難関と言われています。

笠崎さんは熊本県出身で小学生の時に水俣病を知り、環境問題に興味を持って本学に進学しました。昨年12月には「公害防止管理者(水質1種)資格」も取得しました。公害防止管理者資格は、大気、水質、騒音・振動などに分かれしており、特定工場には資格取得者を置くことが義務付けられている国家資格で、水質1種(1種～4種があり、1種が最も範囲も広く、難しい)の合格率は20%程度となっています。

笠崎さんは公害防止管理者の資格取得のために、環境監査が専門である衣川教授に指導を受けるとともに、毎日3時間の学習を3ヶ月間、また環境計量士では1日3時間を半年間、直前の2ヶ月は8時間の勉強を続けたそうです。将来はこれらの資格を生かして、地元の九州で水道局に勤務し、きれいな水環境を守る仕事をしたいと抱負を語ってくれました。

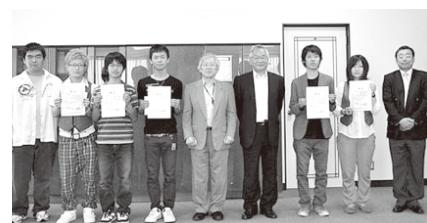


研究所拠点施設学生アイディアコンテスト表彰式を開催

平成22年6月16日(水) 本学が主催する「鳥取環境大学サステイナビリティ研究所拠点 施設学生アイデアコンテスト」の表彰式が学長室において執り行われました。このコンテストは研究拠点施設の建築計画において、本学の特徴を生かした意匠、機能、自然エネルギー活用、コスト縮減などについて、木造建築としてのアイディア募集を目的に本学学生を対象に行ったもので、審査の結果優秀賞2点、特別賞2点、奨励賞4点が選出されました。

田中研究所整備検討委員会委員長からは「様々なアイディアの中から、特に機能性の面を重視して、優れたアイディアを可能な限り設計に反映するようにしたい」と述べられ、また、各受賞作品に対して講評されました。

鳥取環境大学サステイナビリティ研究所は平成22年度末に完成予定で、本学構内のビオトープ東側緑地内に建設予定です。



奈良平城遷都1300年祭にて、学生が「しゃんしゃん傘踊り」を披露

平成22年6月27日(日) 奈良県で開催された「平城遷都1300年祭」で、「鳥取県の日」として県の文化・歴史などの魅力をPRするイベントが開かれ、本学の学生7名が、交流広場まほろばステージに出演、「鳥取しゃんしゃん傘踊り」を披露しました。

はじめに学生が振り付けた創作踊りを2曲、その後、奈良鳥取県人会と一緒に伝統の基本踊り2曲の計4曲を披露しました。学生の元気なかけ声と躍動感溢れる息の合った傘踊りに、会場からは拍手喝采！また、奈良鳥取県人会は、「関西・とっとりすきやねん連」として、鳥取市で毎年8月に開催される鳥取しゃんしゃん祭に参加されていますが、本学学生と一緒に楽しく傘踊りできたことを、大変喜ばれていました。若い力で鳥取をPRできたとともに、奈良と鳥取を結ぶ良い交流の場となりました。



韓国・翰林(ハンリム)大学の学生が来学

平成22年7月14日(水) 烏取県西伯郡南部町の国際交流協会が主催する「韓国ハンリム大学学生ホームステイ事業」の一環として、韓国江原道春川市にあるハンリム大学日本学科の学生9名が来学し、本学学生5名と親睦をはかりました。本学との交流は今年で6年目となります。

当日は、互いに自己紹介をした後、学食で会食をしました。ハンリム大学では、ランチメニューが120円の定食1種類しかないので、自分でおかずを自由に選ぶことのできる本学の学食に驚いていました。その後、「鳥取砂丘」とアフリカをテーマにした砂の彫刻が並ぶ「砂の美術館」を訪問し、鳥取ならではの広大な自然を満喫しました。別れ際には互いのメールアドレスを交換するなど、今年も新たなる学生同士の交流の輪が生まれていました。



公衆衛生学会で 本学環境政策学科の学生が発表

平成22年7月16日(金) 倉吉交流プラザで開催された「第53回鳥取県公衆衛生学会」において、環境政策学科4年の、椿 和也君、国好美波さん、杉原広晃君の3人が、10年程度の人工衛星データを用いた地球規模の降雨量の変化の傾向に関する発表をそれぞれ行いました。

これら3件の発表は、同学会では最年少である学部学生の発表でしたが、好評をもって受け入れられました。そして、全22件中、すぐれた口頭発表2件のうちの1件に、杉原広晃君(環境政策学科4年)が選ばれ、鳥取県代表として、8月25日(水)に松江市で開催された「第56回中国地区公衆衛生学会(環境衛生・環境保全分野)」で、上記3件の発表を纏めた「TRMM(熱帯降雨観測衛星)降雨レーダーで観測した全球の降雨量の長期トレンド」を発表しました。

なお、鳥取県公衆衛生学会への本学からの参加は初めてのことでしたが、学会関係者の方からは今後も本学からの参加を期待したいとのコメントをいただきました。

「環境」でつながる4つの大学の連携事業スタート

学部・学科の名称に「環境」を含み、環境教育に力を入れる、人間環境大学(愛知県)、豊橋技術科学大学(愛知県)、京都学園大学(京都府)、本学の4大学が、「環境マインド要請カリキュラム」をテーマに、平成21年9月協定書を締結(※注)以来初となる、

第1回シンポジウムを、人間環境大学において10月30日(土)に開催しました。

4つの大学はその他にも、4月より実施中の、自校のキャンパスにいながら4大学の授業を受講・単位取得できる、テレビ会議システムを利用した相互利用(単位互換)や、9月に鳥取の八頭郡智頭町芦津で行われた共同フィールドワーク等で連携を深めています。(※注)文部科学省より補助を受け、4大学が連携して取り組んでいる、「大学学部教育における『環境教育』共通カリキュラム開発のための戦略的大学連携」事業。



衣川教授が平成22年度循環型社会形成推進功労者等環境大臣表彰を受賞

平成22年11月2日(火) 環境政策経営学科 衣川益弘 教授が「平成22年度循環型社会形成推進功労者等環境大臣表彰功労者表彰」を受賞されました。衣川教授は、平成14年に行政や消費者団体等と共に「グリーン購入とっとりネット」を立ち上げ、グリーン購入の推進に大きく貢献されました。平成18年には、企業との共同研究でハンダのリサイクル技術を開発。その他、鳥取県版環境管理システム(TEAS)の規格の立ち上げに携わり環境教育に尽力され、平成22年3月には、鳥取県の平井知事より「鳥取県循環型社会推進功労者知事表彰」を受賞しており、学内外での環境教育活動などの功績が認められ、このたびの受賞となりました。



米子-鳥取間駅伝競走大会 3年連続出場

平成22年11月6日(土)、7日(日) 第65回米子-鳥取間駅伝競走大会に本学陸上部駅伝チームが3年連続で出場し、111.1kmを7時間23分47秒で走りきました。(57チーム中49位)3区環境デザイン学科3年押方君が一般の部10位、11区環境政策学科3年川本君が一般の部13位、最終区環境政策学科4年坂爪君は一般の部12位という好成績を収めました。

-出場者一覧-

〈1日目〉

1区:昌子俊介(建築・環境デザイン学科1年)

- 2区:山崎拓哉(環境政策学科3年)
3区:押方功次朗(環境デザイン学科3年)
4区:森 誉史(環境マネジメント学科1年)
5区:玉川理美(環境政策学科3年)
6区:笠崎 大(環境政策学科3年)
7区:児玉竜治(情報システム学科4年)
8区:原 聖史(環境政策学科3年)
(2日目)
9区:金谷龍馬(環境政策学科3年)
10区:漁野昌之(環境政策学科4年)
11区:川本幸洋(環境政策学科3年)
12区:近藤孝紀(環境政策学科4年)
13区:吉田導夫(環境政策学科3年)
14区:渡邊喜美久(環境マネジメント学科1年)
15区:坂爪兆太(環境政策学科4年)



本学学生が平成22年度優秀学生顕彰(日本学生支援機構)の優秀賞を受賞

日本学生支援機構の平成22年度優秀学生顕彰に応募した環境デザイン学科3年の長 毅さんが、社会貢献部門で優秀賞を受賞しました。

〈受賞概要〉

地球温暖化防止のためサークルを立ち上げ、メンバーを集め、勉強会を実施。環境省の温暖化防止の事業に参加し、全国の温暖化防止活動を調査。また、鳥取県に地球温暖化防止活動推進センターを設立し運営を行っていることが評価されました。

長さんが理事を勤める「特定非営利法人ECOフューチャーとっとり」は、平成22年6月に鳥取県より「鳥取県地球温暖化防止活動推進センター」の指定を受けました。本学岡崎副学長が理事長を、環境政策経営学科 衣川教授・本学学生2名・地域住民が理事を、環境マネジメント学科 藤沼教授が監事として参画しており、各都道府県にあるセンターの中でも、全国で初めて大学が主体的に関わっている特色あるセンターです。8月に本学と連携・協力に関する協定を結び、本学に拠点を置いて地球温暖化防止に向けたさまざまな活動を行っています。

〈日本学生支援機構 優秀学生顕彰事業〉学術、文化、芸術、スポーツ、社会貢献の各分野で優れた業績を挙げた学生に対して、これを奨励・支援し、21世紀を担う前途有望な人材の育成に資することを目的とした事業。



今年度の全国からの応募者数は130名。厳正な審査を経て、各分野合わせて、大賞10名、優秀賞19名、奨励賞30名が選ばれました。



旅～記憶～そしてもう一つのテーマ



環境政策経営学科
北崎 寛 教授

作家の太宰治は旅を好んだようである。ある日、旅に出かける太宰を玄関口でつかまえて、奥様は次のように問い合わせた。

「ね、なぜ旅に出るの?」「苦しいからさ」いかにも太宰治らしい屈託を滲ませた返事である。

私も、最近歳のせいもあるのか、旅に出たいという気持が周期的に強くなる。凡夫たる自分には、太宰のような屈折した心理がある訳ではない。旅先も旅程も凡夫らしく凡庸である。

ある程度歳をとると、誰にも忘れ得ぬ土地や風景への執着心が起きてくるようである。たとえば、数十年の時を経ても、なお心の隅っこに、いつまでも残像として居座り、未明独り目覚めたときなどに、その像が急に大きくなったりする。

私が中学・高校時代を過ごした土地の隣にO町という小さな城下町があった。私は、何度かその町に住む友人宅を訪ね、一緒に歩き回った。O町は小京都と呼ばれるように、素朴だが端正なたずまいの町であった。



10年ほど前、久しぶりにO町を訪れた。約30年ぶりのことである。昔日の記憶の作用とはこういうものであろうか。O町の美しい風物ではなく、当時その友人と数度歩いた小道を懸命に探した。かろうじて覚えていた旧友人宅を起点に、頼りない記憶の糸をたどり何度か探索を試みたが、日没が来てその時は諦めた。長い時を隔てた再訪である以上、懐かしさが小さな失望に変わることは避けがたい。漸く数年前の再々訪で、ほぼそれと思われる小道を確認することができた。

「記憶とは、自分の心のなかに自分で書き込む行為で、自分のうちに確かにとどまって、現在の自分の土壤となっているものだ」そんなことを云った詩人がいた。この詩人の言になぞらえるならば、私の小道へのこだわりは、長い時間をかけて、無意識にその記憶を耕し育てて来たことになるのだろう。

その友人は中学・高校を通して秀才であった。社会に出た後もエリートの階段を猛スピードで駆け昇った。しかし50歳を目前にして、組織と仕事の板挟みで自ら命を絶った。自裁の数ヶ月前、中也と伊藤整のなつかしい一節を添えた手紙が届いた。

『「これが私の故郷だ/さやかに風も吹いている…ああ おまへはなにをしてきたのだと/吹き来る風が私に云ふ」やはり故郷はいい。でも、いつの間にか、僕の中に雑々荒涼とした訳のわからない大都会の濁がたまり過ぎた気がする。神社から眺めた風景は今でも本当にいい。僕は都会でこんな風景を壊す手助けをしていたのかという気もしてきた。「何時か皆人が忘れたころ私は故郷へ帰り/閑古鳥のよく聞える/落葉松の林のはづれに家を建てよう」今さらちょ

っと無理かな。せめてこの人間の匂いがする町を守ってほしいものだ。…』彼は、昔から真面目で神經細やかで、弱肉強食、政治的駆け引きなど凡そ似合わない気質の人であった。返信で再会を約しながら、雑事に追われ、その約束を果たさないうちに、悲しい知らせが届いた。人生かくの如しというには、後悔が大き過ぎた。



私は、経営やビジネスを専門とする身である。ビジネスは本来「善」である。しかし、時として、その帰結が「善ならざるもの」になることもないとは云えない。彼の遺言ではないが、戻ることのできる故里、ヒトの温もりが魂を癒す情緒など、ひょっとすると、私達は知らず知らずのうちに、そんな地域と環境を自ら手放しているのかも知れない。そうならば、失われつつあるものを確固と維持継承する構想とそれを実現するビジネスがなくてはならない。

こうしたテーマは私たちの周りに多々ある。例えば、「買物弱者」や「交通弱者」の言葉に象徴されるように、少子高齢化が進行する集落の高齢者の生活インフラの確保などがその一つである。私たちが、再びまみえることができる故里が存続するためには、まず現在居住している人たちが一人でも多く住み続けていただくことが絶対条件である。一度失うと復元不能な資産を後世に引き継ぐ、そんなテーマが彼の死の側に横たわっている気がしている。

年たけて また越ゆべしと 思いきや
命なりけり さやの中山 (西行 齡69)

環境問題啓発コラム

第4回

環境政策経営学科 衣川 益弘 教授

「水に流す」は過去のこと

「水に流す」とは、全ての穢れや邪悪を川などで清め流してしまうことが語源で、これは日本独特の文化だと聞いています。過去の日本は、水は清らかで目の前の汚れたものを水で洗い流しても、自然の浄化能力で河川や湖沼の水が汚れるることは無かった。今日の都市化した日本では、食べ残しをそのまま流したり、米のとぎ汁を流したり、し

ょう油やソースを流したり、また食器洗いや洗濯に使う合成洗剤など、私たちの生活が川や湖を汚染する大きな原因となっています。

例えば、お刺身皿の醤油を流すと、バスタブ1.5杯分のきれいな水で薄めてやっと魚が棲めます。牛乳コップ1杯は、バスタブ10杯を、まして天ぷら油500mlは、バスタブ300杯以上を必要とします。

食材で汚れた食器は、洗い流す前に、紙で

充分ふき取りその後、水で洗うか、汲み洗いをし、洗浄水を植栽の肥料として処理されてはいかがでしょうか。但し、塩分の多いものは避けてください。



あなたのチョッとした気遣いが、身近な河川や湖沼の汚染を守ることにつながります。



弓道部

我々鳥取環境大学弓道部は1~4年生の学生14名が部員です。まったくの初心者や中学生のころからの経験者もいますが、それぞれに目標を持ちながら一丸となって稽古に励んでいます。部活動は主に鳥取市営武道館で行われる週2回の弓道教室で、一般の方々と共に技術の向上に努めています。また、鳥取県内外で行われるさまざまな大会にも出場し、精神面でもお互いを高め合っています。今後とも心・技・体を極めていきたいと思います!!

代表:奥田 珠枝(環境政策経営学科2年)



学生メロディー同好会

私たち学生メロディー同好会は1年生6人、2年生9人、4年生1人の計16人で楽しく活動しています。活動日は各グループによって異なりますが、週に3回、部室や多目的ホールで練習を行っています。現在は5つのグループに分かれ、大学祭での発表に向け練習に励んでいます。また、練習だけではなく、月に1回、親睦会を兼ねた部会を開き、各部員の誕生日にはドッキリ誕生会を企画、夏には海水浴に行くといった、四季折々のイベントを行う、部員同士の仲が良い活発なサークルです。

同好会結成後、約1年半ということもあり、まだまだ学外での発表の回数は少ないですが、今年の3月に大学近辺の老人ホームで、初の学外発表ボランティアを経験しました。最近では、特別養護老人ホーム主催の納涼祭で発表の依頼を受けるなど、勢いに乗ってきました。今後も老人ホームでの発表ボランティアを主体とし、学内はもちろん、学外での活動の幅を広げていきたいと思います。

代表:茗荷 幸也(環境マネジメント学科2年)



サステイナビリティ
Sustainability / 持続可能性

次世代バイオ燃料の適用性評価

本学では、株式会社タクマ(本社:兵庫県尼崎市、社長:手島肇氏)との間で協定を結び、触媒接触分解技術により廃食用油から製造した「次世代バイオ燃料」をスクールバスの燃料として使用する実証試験を平成22年2月から取り組んでいます。

昨今、エネルギーセキュリティーや地球温暖化の観点から、バイオ燃料(原油や石油ガス、天然ガス、石炭ならびにこれらから製造される燃料以外の、動植物に由来する再生可能エネルギー源の燃料)の利用が進められており、特に食料と競合しない廃棄物系由來のバイオ燃料の開発が強く求められています。

そのひとつである廃食用油からバイオ燃料を製造する方法としては主に、バイオディーゼル燃料(BDF)、水素化バイオ燃料、今回実証試験で用いる次世代バイオ燃料などがあります。

今回の研究では、家庭や事業所などから発生する廃食用油から製造したバイオ燃料を、軽油を燃料とするスクールバスの代替燃料として使用し、その適用性を評価することを目的に取り組んでいます。適用性は「軽油と比較して不具合なく走行できるのか」、「バスへの影響はあるのか」、「運転手に対するアンケート」などにより評価しています。

※接触分解法とは、一般的には触媒の作用によって生ずる分解化学反応のことと、ここでは、廃食用油(油脂)を触媒の作用によって分解し、低沸点軽油留分に変換するのもで、粒状の固体触媒を固定床で使用している。



スクールバスへ次世代バイオ燃料を給油



学生を乗せて運行するスクールバス



大学からのお知らせ

保護者の皆様へ

2010年度 保護者懇談会(御礼)

平成22年10月31日(日)大阪会場、11月21日(日)米子会場、11月28日(日)本学会場で保護者懇談会を開催しました。多数の保護者の皆様にご来場頂き、大学の現況報告や個別相談、その他就職に関する相談などを行いました。ご来場頂きました皆様には、厚く御礼申し上げます。来年度も予定(会場未定)しておりますので、是非ご参加ください。



2010年度 学部・大学院 学位授与式

2010年度鳥取環境大学 学部・大学院 学位授与式を下記のとおり執り行います。様々な人との出会いや経験を通して成長した学生の姿をご覧ください。ご家族皆様のご来場をお待ちしております。詳細は、ホームページにてご案内致します。

【日時】2011年3月19日(土)

□9:30/受付開始 □10:30/開式 □13:30/終了予定

【会場】鳥取環境大学 講堂(鳥取市若葉台北1-1-1)

(お問い合わせ先)総務課 TEL. (0857)38-6700



とっとり県民カレッジ連携講座
鳥取環境大学公開講座2010

シリーズIV

自然と建築

建築と緑花

2011.2.19(土) 13:30~15:00

鳥取会場

鳥取県立図書館2階 大研修室



建築・環境デザイン学科
中橋 文夫 教授

花や緑で飾られた街並みに出会うと、清々しい気持ちになります。花と緑の国際博覧会がきっかけとなり、都市に緑化が普及し、今日ではオープンガーデンに発展しました。昨今のガーデニングブームも緑化普及に拍車をかけたようです。さらに、都市のヒートアイランド現象緩和策として屋上緑化や壁面緑化が推奨されています。私はこれらの方法を住宅に取り入れ「建築は植木鉢である」を目指しています。この講座で、「緑化から緑花を目指して」、その方法を学びませんか。

受講料無料

事前に下記まで
お申し込みください。

公開講座お申し込み方法

受講ご希望の方は、受講日の前日までに「受講希望会場・住所・氏名・電話番号」をお知らせください。

*個人情報は、関係法令および本学規定により管理・保管致します。また、本講座の連絡および本学開催の講座・講演会等の催しに関する案内連絡以外の目的では使用致しません。

(お申し込み・お問い合わせ先)鳥取環境大学企画広報課 TEL.(0857)38-6704 FAX.(0857)38-6709 kouryu@kankyo-u.ac.jp

私の世界遺産構想 —大山・隠岐・三徳山—

2011.2.12(土) 13:30~15:00

米子会場

今井書店「本の学校」2階・多目的ホール



建築・環境デザイン学科
浅川 滋男 教授

鳥取県は三徳山を世界遺産に登録すべく努力してきましたが、文化庁等の評価は芳しいものではなく、主題とエリアの見直しを要求されています。そこで私は大山隠岐国立公園に目を向けました。国立公園は「自然の大風景地」であることを必須条件としていますが、その中に神社・仏閣などの文化遺産を含むことを副次条件として掲げています。それは国立公園が自然遺産と文化遺産の両方の要素を持つ「複合遺産」であることを示しています。この講座では、鳥取・島根・岡山の三県に誇る大山隠岐国立公園が、自然の宝庫であるばかりか古代以来の修驗道及び密教の文化と景観を伝える点に着目し、その複合性が三徳山とも共通性を持つことから、新しい世界遺産の主題とエリアを設定し、世界遺産登録までの道筋を示します。